



◀第33回(昭和54年)  
浜町アーケードを埋め尽くす市民おどり



▲第20回(昭和41年)中央町での吹奏楽大行進



▲第1回(昭和22年)「室蘭復興港祭り」の仮装行列

# 港まつり

## — 今昔 —

“まちに活気を”との思いで始まった「港まつり」。時は流れ、移り変わりながら70回を数えた。港とともに歩んできた室蘭人をいつの時代も力付け、楽しませてきた「港まつり」を振り返る。

### 復興を目指し

昭和20年の日本は、敗戦と凶作が重なり、極端な食糧不足に陥っていた。特に室蘭市は基幹産業の生産停止による困窮と食糧不足が深刻で、市民は不安の中、どん底の生活にあえいでいた。

生活に追われ希望のない市民に活気を与えようと、昭和22年7月に戦前の祭りであった「広告祭」「商工まつり」を引き継ぎ、室蘭商工会議所が中心となって第1回「室蘭復興港祭り」が7日間にわたって開催された。

プログラムを見てみよう。仮装行列、変装人探し(市内の名士が変装)、サンパン(小船)競争、舞踏大会、産業展、写生展、洋画展、生花展、相撲大会、歌謡コンクール、自転車競走、現在に続く市民踊りなどで、今聞いても興味をそそる企画が盛りだくさんだ。景品は当時の貴重品だった石けんやチリ紙などの日用品で、大喜びする受賞者の姿が目に見え、祭りがもたらす一体感と高揚感、市民を元気づけ、敗戦から立ち上がる活力となった。

### 祭りの名は変わっても

翌年の第2回は、「復興」の文字が削られ「室蘭港まつり」となる。以降、海の日を中心に、後には夏休みと重なる7月下旬を目途に続く。昭和28年第7回は「室蘭商工まつり」、昭和36年第15回は「室蘭商工港まつり」、さらに名称の変遷はあったが昭和42年第21回からの「むろらん港まつり」が今に続いている。



▲第28回(昭和49年)ミス港まつり

▼第39回(昭和60年)へそ踊りで盛り上がる中島町



### 室蘭ばやし

作詞 関沢新一  
作曲・編曲 安藤実親

イロハの口の字が 仲良く六ツ  
手と手をつないだ まん中で  
今日も咲きます あの花  
室蘭良いとこ 年がら年中  
来てみて 見てみて 住んでみて  
お手を拝借 まちづくり

### 記念事業とともに

昭和25年第4回には、「室蘭音頭」が登場し、市民おどりを盛り上げた。昭和27年第6回では、開港八十年・市制施行三十年行事と共催し、室蘭初の納涼花火大会が開催された。昭和37年第16回では開港九十年・市制施行四十年行事と共催し、第1回「夜景まつり」が測量山で行われる。昭和47年第26回の開港百年・市制施行五十年行事との共催では、新たな室蘭の明るいイメージを持つ祭り唄の制作を日本クラウンに依頼。北島三郎が歌う「室蘭ばやし」が披露された。その後は開港・市制施行の記念の年に、ノックスビル訪問団のねりこみ参加(第46回)など姉妹都市や交流都市からさまざまな団体が訪れ、イベントが開催されている。

時代は平成を迎え、平成2年第44回に軽快なリズムの「室蘭サンバ」が登場し、市民おどりに花を添えた。平成4年第46回は、開港百二十年・市制施行七十年と重なり、室蘭統一まつりと称し、第1回「室蘭ねりこみ」がイベントの目玉となった。今年も企業や各団体が趣向を凝らした山車で参加し、祭りの名物としてまちを熱気で包んでくれている。



今も昔も「祭り」と聞いて、心弾み胸踊るのは、祭りには人を励まし、気持ちを奮い立たせる力があるからなのだろう。これからも、港とともに歩んで行く室蘭人の「まつり」として、港に感謝し、港の安全と発展を願い、末永く祝いの節目を重ねてゆこう。

### 室蘭音頭

作詞 福田清・野村俊夫  
作曲・編曲 竹岡信行

ハア、伸びる室蘭 伸びる室蘭  
世界の波止場  
出船入船 ソレ 宝船  
街はネ 街は繁昌で  
ヨイトサノサ ソレ  
今日も黄金の 波がうつ  
テモサツテモ ミナトむろらん  
ヨイトコロ



▶第2回(昭和23年)  
札幌通の丸井デパート前でぎわう人々

▼第12回(昭和33年)  
大町を行進する仮装パレード



▲第15回(昭和36年)  
白塗りで祭りのしたく



▲第16回(昭和37年)  
記念事業と共催した「室蘭商工港まつり」

### 室蘭サンバ

作詞 川根貞雄  
作曲 赤坂洋  
編曲 七戸賢一

紺のジーンズ 法被に浴衣  
眉もキリリと むろらんまつり  
どさんこ娘に ハイイ、ハイハイ  
むろらん娘に ハイイ、ハイハイ  
ためいきつかせる若い衆 若い衆  
ヨイヨイヨイヨイ  
ソレソレ、ソレソレ、  
ソレソレ、ソレソレ



▶第66回(平成24年)  
花火とともに海王丸と客船飛鳥IIが港を彩る